

速読

20:20～20:30

『変わる学力調査』

構成確認	1分7秒
1回目（低速）	4分48秒
2回目（高速）	3分36秒
3回目（要旨理解）	3分

※2回目は、拾い読みでチャレンジしましょう！

変わる学力調査



2022年の全国学力調査では、質問紙調査に端末を使って生徒たちが回答した。同年4月、東京都内の中学校、代表撮影

コンピューターに解答を入力

個別の問題で詳細な学力把握

小学6年と中学3年が毎年4月に受ける全国学力調査が、今年度から変わる。コンピューターで答える方式が始まるからだ。また、一人ずつ違う問題を出し、「より詳細な学力を把握できる」とも文部科学省は説明する。学力調査はどう変わるのか。

昨秋、サンプル問題を文部省が公表した。ルーペの正しい使い方を四つの動画から選ぶ▽記号を画面上で動かして電気回路図を完成させる▽などだ。コンピューターを用いるテストをCBTという。今年度で中学理科で始めて、2026年度は中学英語も、27年度以

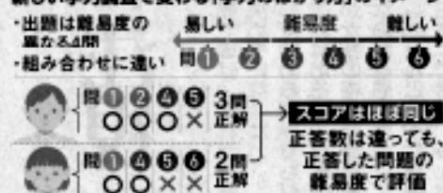
降は小学校に広がる。

なぜCBT化するのか。まず、端末が増えたことが原因。学校をICT化する「GIGAスクール構想」を国が19年から進め、コンピューターの1人1台配備が実現した。その結果、約200万人が受ける全国学力調査もCBT化できる条件が整った。

利点の一つがコスト削減。紙の印刷や配送費（24年度で約13億6千万円）などを抑えられる。また、動画・音声を用いて出題の幅を広げられるほか、「様々な配慮が必要な児童生徒も参加しやすい」と（文部省担当者）。例えば、文字の拡大やルビ振りを希望する場合、従来は、事前申請を受けて別の問題用紙を用意していた。

「CBT慣れ」という狙

新しい学力調査で変わる「学力のはかり方」のイメージ



新しい学力調査で変わる「学力のはかり方」のイメージ。出題は難易度の異なる4問。組み合わせに違い。スコアはほぼ同じ。正答数は違っても、正答した問題の難易度で評価。

Bさんは問題①④⑤⑥、Cさんは問題②③⑥⑦。一となるようなイメージ。多くの種類の問題を出すことで、子どもたちの課題のありかをより細かくつかめるが、紙では困難だった。子どもによって解く問題の観点や難易度が変わることになるが、「評価に問題はない」とする。正答数ではなく、どの難易度の問題に安定的に正答したか、という点でみるからだという。そもそも、「調査は順位付けではなく、児童生徒の学習

英検や簿記、就活でもCBT

CBTは、すでに多くの試験で使われている。大学の医学部や歯学部、学生の臨床実習前に受ける共用試験は05年から、就職活動でよく用いられるウェブテストもCBTだ。

実用英語技能検定（英検）やTOEFLなどの語学試験、日商簿記やITパスポートなどの資格試験も、テストセンター

状況を把握し、授業改善などに役立てることが目的」と担当者は話す。大量の問題を用意する一方、多くを非公表とする。同じ問題を別の年の調査でも使えるため、学力をより客観的に評価できる。また、調査日をずらせるので「不登校や長期入院の子も受けやすくなる」と説明する。

課題は、端末の一斉使用に耐えられる通信容量の確保。文科省は、学校で推奨通信速度を保てるようネットワーク環境の改善を求めている。すでに授業で用いており、端末操作に問題はないとみられている。今年度の調査は17日にあるが、CBTで進める中学理科だけは、ネットワーク全体の負荷を軽くするため、14、17日に、各校で実施日を分散させる。

で端末を使って解答する形が広がっている。02年に導入した日本漢字能力検定（漢検）は、受験機会の増加が目的だった。日本漢字能力検定協会のによると、紙だと多くて年18回程度だったのが、CBTだとほぼ毎日可能。担当者は「1年間、20回も受験した人がいた」と効果を実感している。

（山本智佳）

変わる学力調査

2022年の全国学力調査では、質問紙調査に端末を使って生徒たちが回答した＝同年4月、東京都内の中学校、代表撮影

コンピューターに

解答を入力

個別の問題で

詳細な学力把握

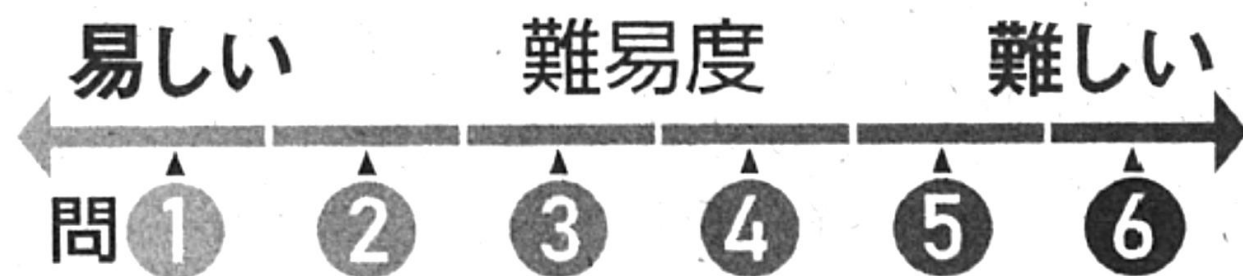
英検や簿記、

就活でもCBT



新しい学力調査で変わる 「学力のはかり方」のイメージ

- ・出題は難易度の異なる4問
- ・組み合わせに違い



	問	①	②	④	⑤	3問 正解
		○	○	○	×	
	問	①	④	⑤	⑥	2問 正解
		○	○	×	×	

→ **スコアはほぼ同じ**
正答数は違っても、
正答した問題の
難易度で評価

1 小学6年と中学3年が毎年4月に受ける全国学力調査が、今年度から変わる。コンピューターで答える方式が始まるからだ。また、1人ずつ違う問題を出し、「より詳細な学力を把握できる」とも文部科学省は説明する。学力調査はどう変わるのか。

2 昨秋、サンプル問題を文科省が公表した。ルーペの正しい使い方を四つの動画から選ぶ▽記号を画面上で動かして電気回路図を完成させる――などだ。コンピューターを用いるテストをCBTという。今年度に中学理科で始めて、2026年度は中学英語も、27年度以降は小学校に広がる。

3 なぜCBT化するのか。まず、端末が増えたことがある。学校をICT化する「GIGAスクール構想」を国が19年から進め、コンピューターの1人1台配備が実現した。その結果、約200万人が受ける全国学力調査もCBT化できる条件が整った。

4 利点の一つがコスト削減。紙の印刷や配送費（24年度で約13億6千万円）などを抑えられる。また、動画・音声を用いて出題の幅を広げられるほか、「様々な配慮が必要な児童生徒も参加しやすくなる」（文科省担当者）。例えば、文字の拡大やルビ振りを希望する場合、従来は、事前申請を受けて別の問題用紙を用意していた。

5 「CBT慣れ」という狙いも見える。経済協力開発機構（OECD）による3年に1回の国際学力調査「学習到達度調査」で、日本は、CBT化された15年以降、「読解力」の順位が2回続けて下がった。コンピューターでの解答に子どもが不慣れだったとも指摘された。

6 ただ、期待する最大のメリットは「詳細な学力の把握」だという。文科省は、CBT化した調査では、子どもごとに問題を変えたと説明している。例えば、ある教科の大問四つの内訳が、Aさんは問題①②④⑤、Bさんは問題①④⑤⑥、Cさんは問題②③⑥⑦――となるようなイメージ。多くの種類の問題を出すことで、子どもたちの課題のありかをより細かくつかめるが、紙では困難だった。

7 子どもによって解く問題の観点や難易度が変わるようになるが、「評価に問題はない」とする。正答数ではなく、どの難易度の問題に安定的に正答したか、という点でみるからだという。そもそも、「調査は順位付けではなく、児童生徒の学習状況を把握し、授業改善などに役立てることが目的」と担当者は話す。

8 大量の問題を用意する一方、多くを非公表とする。同じ問題を別の年の調査でも使えるため、学力をより客観的に評価できる。また、調査日をずらせるので「不登校や長期入院の子も受けやすくなる」と説明する。

9 課題は、端末の一斉使用に耐えられる通信容量の確保。文科省は、学校で推奨通信速度を保てるようネットワーク環境の改善を求めている。すでに授業で用いており、端末操作に問題はないとみている。今年度の調査は17日にあるが、CBTで行う中学理科だけは、ネットワーク全体の負荷を軽くするため、14、17日に、各校で実施日を分散させる。

10 CBTは、すでに多くの試験で使われている。大学の医学部や歯学部の学生が臨床実習前に受ける共用試験は05年から。就職活動でよく用いられるウェブテストもCBTだ。

11 実用英語技能検定（英検）やTOEFLなどの語学試験、日商簿記やITパスポートなどの資格試験も、テストセンターで端末を使って解答する形が広がっている。

12 02年に導入した日本漢字能力検定（漢検）は、受検機会の増加が目的だった。日本漢字能力検定協会によると、紙だと多くて年13回程度だったが、CBTだとほぼ毎日可能。担当者は「1年間で20回も受検した人がいた」と効果を実感している。

1

小学6年と中学3年が
毎年4月に受ける全国学
力調査が、今年度から変
わる。コンピューターで
答える方式が始まるから
だ。また、1人ずつ違う
問題を出し、「より詳細
な学力を把握できる」と
も文部科学省は説明する。
学力調査はどう変わる
のか。

昨秋、サンプル問題を文科省が公表した。ループの正しい使い方を四つの動画から選ぶ▽記号を画面上で動かして電気回路図を完成させる——などだ。コンピューターを用いるテストをCBTという。今年度に中学理科で始めて、2026年度は中学英語も、27年度以降は小学校に広げる。

なぜCBT化するの
か。まず、端末が増えた
ことがある。学校をIC
T化する「GIGAスク
ール構想」を国が19年か
ら進め、コンピューター
の1人1台配備が実現し
た。その結果、約200
万人が受ける全国学力調
査もCBT化できる条件
が整った。

利点の一つがコスト削減。紙の印刷や配送費（24年度で約13億6千万円）などを抑えられる。また、動画・音声を用いて出題の幅を広げられるほか、「様々な配慮が必要な児童生徒も参加しやすくなる」（文科省担当者）。例えば、文字の拡大やルビ振りを希望する場合、従来は、事前申請を受けて別の問題用紙を用意していた。

5

「CBT慣れ」という狙いも見える。経済協力開発機構（OECD）による3年に1回の国際学力調査「学習到達度調査」で、日本は、CBT化された15年以降、「読解力」の順位が2回続けて下がった。コンピューターでの解答に子どもが不慣れだったとも指摘された。

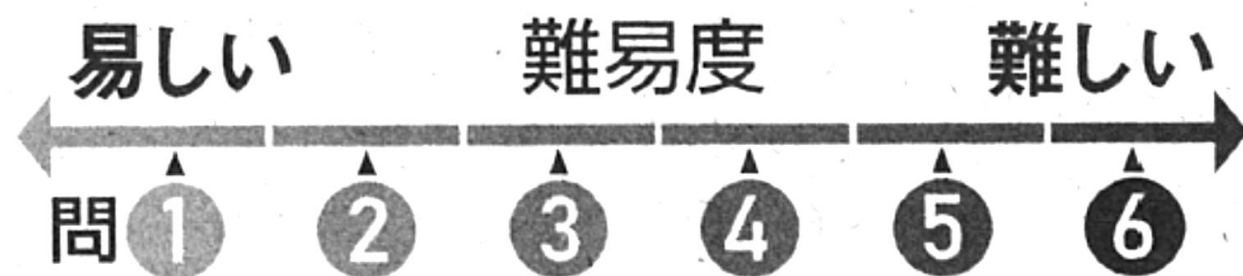
ただ、期待する最大のメリットは「詳細な学力の把握」だという。

文科省は、CBT化した調査では、子どもごとに問題を変えると説明している。例えば、ある教科の大問四つの内訳が、
Aさんは問題①②④⑤、
Bさんは問題①④⑤⑥、
Cさんは問題②③⑥⑦――
となるようなイメージ。多くの種類の問題を出すことで、子どもたちの課題のありかをより細かくつかめるが、紙では困難だった。

子どもによって解く問題の観点や難易度が変わることになるが、「評価に問題はない」とする。正答数ではなく、どの難易度の問題に安定的に正答したか、という点でみるからだという。そもそも、「調査は順位付けではなく、児童生徒の学習状況を把握し、授業改善などに役立てることが目的」と担当者は話す。

新しい学力調査で変わる 「学力のはかり方」のイメージ

- ・出題は難易度の異なる4問
- ・組み合わせに違い



	問	①	②	④	⑤	3問 正解
		○	○	○	×	
	問	①	④	⑤	⑥	2問 正解
		○	○	×	×	

→ **スコアはほぼ同じ**
正答数は違っても、
正答した問題の
難易度で評価

大量の問題を用意する
一方、多くを非公表とする。同じ問題を別の年の調査でも使えるため、学力をより客観的に評価できる。また、調査日をずらせるので「不登校や長期入院の子も受けやすくなる」と説明する。

課題は、端末の一斉使用に耐えられる通信容量の確保。文科省は、学校で推奨通信速度を保てるようネットワーク環境の改善を求めている。すでに授業で用いており、端末操作に問題はないとみている。今年度の調査は17日にあるが、CBTで行う中学理科だけは、ネットワーク全体の負荷を軽くするため、14～17日に、各校で実施日を分散させる。

CBTは、すでに多くの試験で使われている。

大学の医学部や歯学部
の学生が臨床実習前に受
ける共用試験は05年か
ら。就職活動でよく用い
られるウェブテストもC
BTだ。

実用英語技能検定（英検）やTOEFLなどの語学試験、日商簿記やITパスポートなどの資格試験も、テストセンターで端末を使って解答する形が広がっている。

02年に導入した日本漢字能力検定（漢検）は、受検機会の増加が目的だった。日本漢字能力検定協会によると、紙だと多くて年13回程度だったが、CBTだとほぼ毎日可能。担当者は「1年間で20回も受検した人がいた」と効果を実感している。

（山本知佳）